

慧光

Echo No. 147
平成30年正月

院寺寺寺	*	一	峰	院
羽村臨濟会	*	*	福	寺
	*	*	林	寺
	*	*	禅	寺

「天」は見ている

古代の支那では新しい皇帝が即位すると、かならず泰山という聖なる山に登り、「封禪」という儀式をしました。封禪というのは、新しく即位した皇帝は正統な皇帝であると、天に証明してもらう儀式のことです。自分は怪しい者でもなく、卑しい出の者でもない。貴い一族の出であり、貴い血が流れているという証明を、まず新しい統治者は必要としたのです。神とも仏ともつかぬ超自然的な宇宙の総体を「天」と呼び、その天に自らの権威と正統性を証明してもらったのです。

現代の常識では、こんなことは独善の極みであり、何の価値もないと一蹴されてしまうかも知れませんが、天に対する畏れというものを持ち合わせていた昔の王朝は、ある意味まともな宗教国家であったとも言えます。現代のわれわれは、昔の人を古臭いと笑えるのでしょうか。昨年アメリカに「アメリカファースト」を掲げる大統領が誕生して以来、都民ファーストやら何々ファーストが流行りました。これはつまり自分の利益（自利）が一番大事だということであり、残念乍ら

他の利益を計る（利他）という仏教精神からは、最も遠い考え方です。その延長線上に、数々のごまかしをする大企業、ひきも切らない振り込め詐欺等の犯罪集団、他人を身心ともに傷つけるイジメの問題があります。目を国外に転ずれば、自利行は世界を掩い尽くしています。

多くの国がカトリック教会の脅威から自由になるべく生み出された政教分離を国是とし、公的な空間からあらゆる宗教色を一掃し、それが近代国家であると胸を張った挙げ句の果てが、天をも恐れぬ人間を生み出し、その人間が、天をも恐れぬ所業を為している、というのが現代の状況でしょう。

昔人間を見ていた天は、今でも人間を見ているのです。近代科学のおかげで、われわれはそれを感じる能力を失ってしまったのです。「天に恥ず」というわが国伝統の感性を、取り戻したいものです。

（禅福 泰文）

白隠禅師坐禅和讃を

読んでみる その十

いわんや自ら回向(えこう)して

直(じき)に自性を證すれば

自性即ち無性にて

すでに戲論(けろん)をはなれたり

(白隠禅師坐禅和讃より抜粋)

米回向——回らし、向かわす。他者のために自ら善行を行うこと。自分の積んだ功德を自分の手柄とせず、他者にさしあげる。また、僧侶が葬儀や年忌法要などの読経の後、読み上げている掲文も回向という。お焼香してくださった方々のお心や、詠んだお経の功德を供養の対象者にお供えするということになる。

(意識)

「日頃の生活において周囲にきをとられずに、しっかり自分自身をみつめることができれば、確固たる自分というものは

存在しないということが分かるであろう。」

回向とは、あたかもその人が発する光が周囲を照らすようなものです。芸能人などスーパースターに直接お会いした御経験がある方などは、「オーラが出ていた」とよく表現されますね。芸能人に限らず、友人や先輩や家族など、自分を照らしてくれる存在、自分に元気を下さる存在が、皆さまの周りにいてくれるはずですよ。

しかしながら、他者の才能や可能性を認めることは大事なことです。必要以上他者を認めてしまうことによつて、肝心の自分自身を卑下してしまうことに繋がる場合もあるように思います。つまり自分よりデキル人、自分にはない経験を持っている人と接していると、ついつい自分の未熟な部分と比べてしまつて、逆に気落ちしてしまうことがあるようです。ここで白隠禅師がおっしゃっているのは、自分の周囲ばかりを気にせず、しっかりと自分自身のことも見つめて、自分の持っている可能性を信じてみましょ

うということですよ。

ここ一年、我が家の食卓にカレーライ스가並ぶことが増えました。うちの娘たちも気に入って食べており、日本の国民食と言える食べ物です。給食のカレー、ご家庭のカレー、インド料理屋のカレー、カレーパンにカレーうどん。一口にカレーと言っても、様々なカレーがあり、味の具材も、牛肉・豚肉・鶏肉め魚介類、野菜も定番の三種だけでなく、ナスやきのこやトマトなど、それぞれのご家庭の味があると思います。どのカレーが一番美味しいか、などということは一概に言えません。

我々人間も一緒のような気がします。周囲は自分に対して、様々な期待を下します。しかし、時には周りを気にせずに、自分の持っている素晴らしい才能を信じて、文字通り自信を持って生きてみるのもいいような気がします。自分にしか出せない味が必ずみつかるとは限りません。(宗禅寺 高井和正)

禪と共に歩んだ先人

まつ お ば しょう 松尾芭蕉Ⅶ

臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き江戸時代前期に生き、日本の俳諧（俳句）を芸術的域にまで高め大成させた「俳聖」とも呼ばれる「松尾芭蕉」についてお話させていただきます。たいと思います。

ふるいけ かはつ 古池や蛙飛びこむ水の音

「野ざらし紀行」の旅において、自らの禪的境涯を高め、「物我一致」の境涯を得た芭蕉は、「蕉風」と呼ばれることによる新たな俳句のスタイルを確立しました。

芭蕉は生涯を通じ、その「蕉風」をより進化・深化させていきました。

「野ざらし紀行」の旅から江戸に戻つ

た芭蕉は春に芭蕉庵（芭蕉の住。ここから自らの俳号を採る）で催した蛙の発句会で、有名な「古池や蛙飛びこむ水の音（ふるいけや かはつとびこむ みずの音おど）」を詠みました。それまでは「鳴く」ところに注意が及んでいた蛙の「飛ぶ」点に注目し、さらにそれを「動」を表すものでなく「静寂」を引き立てるために用いた詩情性は過去に無い画期的なもので「蕉風」俳階を象徴する作品になりました。

りしました。
「鹿島詣」
翌年（貞享四年 千六百八十七年）鹿島

（茨城県鹿島市）に旅行した芭蕉は、旧知の禅僧、仏頂禅師と面会し、そこでその禪的境涯を認められ、悟りの印可（悟りの境地に至った事を認めるもの）を受けました。

印可を受けて、自らの求めていたものが間違いはなかったと確信を得た芭蕉は、早速その年の十月に「笈の小文」の旅にでました。因みに「笈」とは書物な

どをいれて背負う竹製のはこの事です。この旅では伊勢神宮（現在の三重県。芭蕉の郷里）を経て、大阪・明石・京都へと向かいました。「蕉風」の確立とともに芭蕉の名声も高まり、各地より招じる声が多く届いていたのに応えるという理由と亡父の三十三回忌に列席したいとの思いでなされた旅でした。滞在した各地でそれぞれ句会を催し、「蕉風」はさらに多くの人、地域に受け入れられました。

さらしなきこう 「更級紀行」

京都から江戸への復路を紀行文にしたものが「更級紀行」です。京都から尾張（現在の愛知県西部）に入り、木曾（現在の長野県南西部）を経て信州（現在の長野県）に至る旅となりました。「鹿島詣」「笈の小文」「更級紀行」といった旅を通して「蕉風」は更に広まり、また進化・深化し、集大成ともいえる「おくのほそ道」へとつながっていくのです。

以下次号（一峰 義紹）



禅寺雑記帳

◆二〇一八年の幕が開きました。本年も羽村臨済会をどうぞよろしくお願いいたします。

◆平成では三十年となった訳ですが、来年四月三十日に今上の天皇陛下が退位される事が決まり、平成という時代もあとわずかとなってしまいました。毎日、日本国と国民の健やかなることを祈ってくださる天皇陛下と、それを支えて来られた皇后陛下に感謝し、残された平成の一日一日を大事にしたいと思います。

◆平成の三十年、嬉しいことも沢山ありました。阪神大震災や東日本大震災など、つらいことも沢山ありました。その都度両陛下が被災地を見舞われ、ひざまずかれてやさしく慰められたことで、被災地の方だけでなく、どれだけ私たち日本人は皆、励まされたことでしょうか。

◆坊さんが天皇陛下の事を言うのかと不思議に思われる方もあるかもしれませんが、『心地観経』というお経は、私たち仏教徒が忘れてならない感謝の気持ち、「恩」を持つべき対象として「父母」「衆生」「国王(国)」「三宝」の四つをあげています。(まとめて「四恩」といいます)

日本では天皇陛下がここである「国王」にあたる存在です。臨済宗のお寺の本堂の中央には必ず、今上天皇のご健康と御長寿、国家の安泰を願う牌がまつられ、毎月一日と十五日にはその為のお経(祝聖といえます)があげられており、これは鎌倉時代からずっと続けられています。

◆もちろん「四恩」の他の恩、「父母」(先祖)、「衆生」(お世話になった方々や、毎日頂いて来た他の命など)、「三宝」(仏と法と僧、正しく導いてくれる仏教の教えのこと)も忘れてはなりません。あらゆるものは縁でつながり、そのつながりのお陰で自分という命が存在しているのです。全ての「おかげさま」の恩に感謝

して、自分が負うべき義務をきちんと果たして生きることが、私たちそれぞれの務めです。天皇皇后両陛下がまさに、そのお手本です。縁で与えられた自分の役割を、しっかりと果たしていきましょう。

◆かの徳川家康は、
「正月暁天より、その歳の大晦日と心得ること」

との言葉を残しました。文字通り読めば、「元旦から、この年も必ず大晦日が来る」と心得なさい

ということですが、一年、三百六十五日の事だけを言っているのではなく、どんな事にも始まりがあれば必ず終わりが来ると考えて常に緊張感を持って臨むようにとの意味を含んだ教えです。このような考え方を守り、江戸という世界一平和な時代は二百六十年以上も続いたのです。しかしここはあえて文字通りに読んで、ぼんやりしているとあつという間に過ぎ去ってしまうであろうこの一年を大事にしていききたいと思えます。(禅林 恭山)